

つなぐ 69

2024年秋号
令和6年9月発行
第19巻第2号
(通巻69号)

地域医療を考えるペガサス情報誌

Special
外傷をはじめ、
運動器の疾患に
立ち向かう
七人の医師たち。



日々知識と技術を磨き、 質の高い医療をめざす 整形外科の姿勢。

馬場記念病院の整形外科は、

部長、副部長、医長、医員の合計7名体制。

ベテランから中堅、若手のバランスのいい構成で、

質の高い診療を行っている。

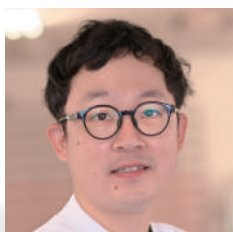
診療の中心は、急性の外傷と手外科の領域。

たとえば、高齢者の転倒による骨折、

交通事故などの外傷に24時間365日対応し、

適切な治療を速やかに提供。

早い段階からリハビリテーションを開始し、



馬場記念病院
リハビリテーション部
理学療法士
斉藤 典孝



馬場記念病院
整形外科 医長・
救急部 副部長
柴田 将伍



早期回復とADL（日常生活動作）の向上に努めている。

また、2名の手外科指導医が中心となって、

肘、前腕、手関節、手の疾患に対し、

専門性の高い精緻な手術治療を行っている。

整形外科では日々の臨床だけでなく、

勉強や研究にも力を注いでいる。

平日はほぼ毎日、医師たちは1時間ほど早く出勤し、

早朝カンファレンス、

早朝勉強会でディスカッションしている。

さらに、学会発表にも積極的に取り組み、

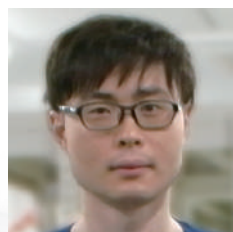
医師全員で学び合い、常にスキルアップを図っている。

今回の『つばさ』では、

整形外科の中堅医師たちの活躍を中心に追いながら、
整形外科の強みや診療に対する姿勢を紹介していく。



馬場記念病院
整形外科 副部長
福田 誠



馬場記念病院
整形外科 医長
大西 勝亮



馬場記念病院
整形外科 部長
安田 匡孝



高齢者に多い転倒による骨折。 痛みの軽減と早期回復のために。

近年、筋力の低下に伴い、何気ない動作から転倒して骨折し、救急外来を受診する高齢の患者さまが増えている。そうした患者さまに対する、整形外科の取り組みを見ていきたい。

転倒して、 股関節を骨折。

麗らかな春のある日、馬場記念病院に90代の女性が救急搬送されてきた。自宅で転倒し、臀部を強く打ち、痛くて動けなくなったという。その日、整形外科の救急当番は柴田将伍医師（救急部副部長兼任）だった。柴田医師は連絡が入ると急いで救急外来に行き、患者さまを迎えた。「何でやろう、痛い痛

い。股関節がすごく痛い」。激しい痛みを訴える患者さまに対して、柴田医師はX線撮影とX線CT撮影の指示を出した。

検査の結果は右足の大腿骨転子部（脚のつけ根の部分）の骨折。高齢者に多く見られる症例である。また、画像からは骨粗鬆症（骨の量が減って骨が弱くなり、骨折しやすくなる病気）の所見も見られた。年齢的にかなり骨粗鬆症が進んでいて、ちょっとした弾みで骨が折れやすくなっていたのだろう。



同じ部位の骨折でも、折れ方は千差万別。柴田医師はそれぞれの症状に合わせ、適切なアプローチで治療に取り組む。

手術による 治療を提案し、 同意を得る。

柴田医師は患者さまとご家族に、診断と治療法について説明した。

一般に骨折の治療は、ギプスなどで固定する保存的治療と、手術による治療がある。かつて大腿骨転子部骨折に対しては、保存的治療が行われていたが、折れた骨がうまく接合されなかったり、骨癒合（こつゆごう、

※1）に数カ月を要して合併症を引き起こすこともあった。現在は医療の進歩もあり、折れた骨を器具で固定する骨接合術が第一選択となっている。もともとこの患者さまは、杖も使うことなく元気に歩いていた。柴田医師は、以前のように歩けるためにも手術をすすめ、ご本人、ご家族の同意を得た。

二日後、手術室には柴田医師と助手の医師、麻酔科の医師、看護師、放射線技師が顔を揃えた。最初に麻酔科医が腰部から針を刺し、麻酔薬と鎮静薬



外来で患者さまへ病状を説明する柴田医師。
丁寧でわかりやすい説明を心がけている。

を投与。患者さまが麻酔の状態になったのを確認し、柴田医師は股関節の外側にメスをいれ、手術を開始した。柴田医師は、3カ所から金属製の髓内釘（ずいないてい、※2）を大腿骨の髓腔（骨の中央の骨髄が入っているところ）に挿入し、慎重に中で組み立てていった。組み立て終わると、正しい位置に器具が入ったかどうか、折れた骨が適切な位置に戻っているか、X線撮影をして画像を確認。髓内釘にセメントを充填し、骨としっかり固定した。手術時間は、およそ1時間弱だった。

「術後のリハビリテーションを考え、 セメントオーギュメンテーションを 積極的に用いています」と柴田医師。

（※1）骨癒合とは骨がくっつくこと。
（※2）髓内釘とは骨折部位を固定するための器具。

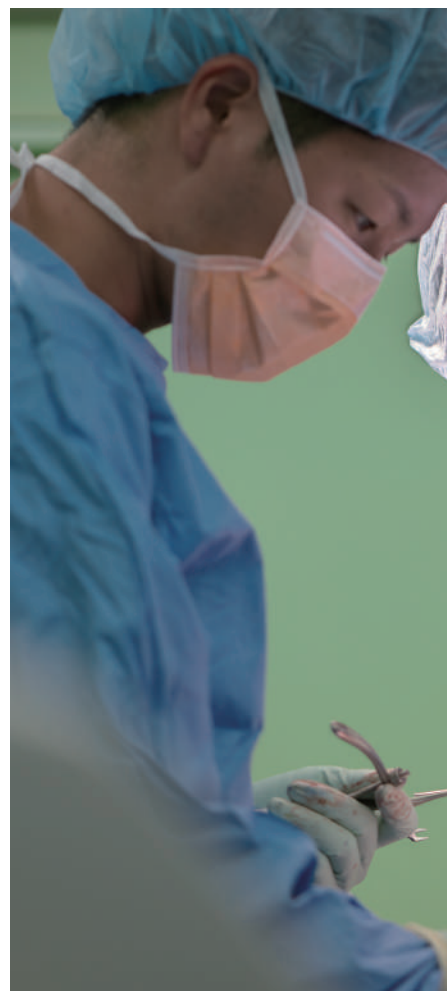
固定力が高まる、 セメントオーギュメン テーション。

今回、柴田医師が採用したのは、「セメントオーギュメンテーション」というセメントで補強する髓内釘を用いる方法である。これは、欧米ではかなり以前から採用されている手術法で、日本では令和3年4月より使用できるようになった。

柴田医師は次のように話す。

「骨粗鬆症の場合、折れた骨の周辺の骨も弱くなっているのので、しっかりと固定させることが大切です。その固定力の強化のために、大腿骨に挿入した髓内釘にセメントを注入する手法はとても有効です。接合部がしっかりと固定されれば、立ったり、歩くときに、折れた骨の周囲にかかる負担を軽減でき、リハビリテーションにしっかりと取り組めます。結果として、早く歩行能力を取り戻すことができ、メリットがあります」。

柴田医師は、セメントオーギュメンテーションを用いた症例について、学会でも積極的に発表。



どんな患者さまに適用するの
がよいかなどについて、国内外
の医師が積極的に意見交換を
図っている。

手術前から始まる リハビリテーション。

骨折後に歩行能力を取り戻
すには、リハビリテーションが重
要な役目を果たす。そのため
柴田医師は手術が決まると同
時にリハビリテーションを指示。
理学療法士がベッドサイドに出
向き、折れていない方の足を動
かす運動などを行い、廃用症候
群（安静状態が続くことによっ

て、心身の機能が低下するこ
と）の予防に努めた。

手術が終わると、本格的なり
ハビリテーションのスタートであ
る。ベッド上で起き上がる訓練、
車いすに乗り移る訓練などが
行われた。車いすに移乗した患
者さまは「手術した右足に体
重をかけても、思ったほど痛く
ありません。よかった」とうれし
そうな表情を浮かべた。痛みが
少ないのは、セメントオーギュメン
テーションという手術法の成果
といえるだろう。その後まもな
く歩く訓練も始まり、1週間
ほどで、リハビリテーション病院
に転院。約2カ月間、集中して
リハビリテーションを続け、以前

と変わらない歩行能力を取り
戻し、退院することができた。

北館5階病棟のリハビリテー
ション責任者である斉藤典孝
（理学療法士）は次のように話
す。「この患者さまのように、整
形外科では手術が決まるとす
ぐにリハビリテーションの処方
がされます。それだけ先生方
は、手術すれば終わりではな
く、患者さまの生活を見据えて
リハビリテーションのことを大切
に考えているのだと思います。
ですから私たちも手術前から
深く関わり、廃用症候群の予
防はもちろん、床ずれの予防、
嚥下機能の維持、認知機能の
チェック、転倒事故の予防など



「高齢の患者さまが多いので、筋力が落ちないように
リハビリテーションに力を注いでいます」と斉藤。

に取り組むことができます。こ
のように早くからリハビリテー
ションに取り組むことが、患者
さまの早期の回復を促すこと
もに、合併症を予防し、寝たき
りにならないように支えている
のだと自負しています」。

専門医になってから、 希望して 馬場記念病院へ。

ここで、柴田医師の経歴につい
て簡単に振り返っておきたい。

柴田医師は大阪市立大学
（現大阪公立大学）出身。大阪

市内の病院で初期臨床研修を
受けて、後期臨床研修中の医師
4年目に馬場記念病院に配属
された。その後も大学医局の人
事でいくつかの病院を経験し、
整形外科の専門医の資格を取
得。赴任先の第一希望として、
馬場記念病院を希望した。

なぜ、馬場記念病院だったの
か。「働きやすい環境が決め手
でした。当院は整形外科の先
輩、後輩はもちろん、コメディカ
ルの方々との関係も良く、何で
も相談し合える。人間関係が
良好で、患者さまとの距離も近
いところがとても気に入ってい



毎日のように病棟を訪れ、ベッドサイドで患者さまを診察する柴田医師。

ます」(柴田医師)。赴任して4年目、今は目の前の診療だけでなく、視野も広がってきた。「当院では患者さまが以前の生活を取り戻せるように、いろいろなスタッフが多方面からアプローチしています。そうした流れも理解し、患者さまの生活復帰をより強く意識できるようになりました」。

救急搬送が多い 馬場記念病院で。

馬場記念病院では、交通事故や転倒事故による救急搬送が多い。整形外科では平日・土曜日の午前と午後に救急当番を決めていて、その医師のPHS(医療用)に連絡がいくシステム。休日、夜間は経験豊富なベテラン医師の応援を頼んでいる。「救急当番の日は、いつPHSが鳴るかかわらないので緊張しますね。でも多くの症例を経験させていただきやりがいを感じています。骨折といつても、骨の折れ方は千差万別で、治療の難易度も変わります。これからも経験を重ね、整形外科のスキルを磨いていきたいと思います」。柴田医師は救急部の副部長を兼任し、救急医療において重要な

「退院後の外来で、患者さまの
元気な姿や笑顔を見られるのが、
整形外科医としての喜びです」(柴田医師)。



丁寧な触診を行う柴田医師。
どんな動作で患者さまが痛みを感じるのかしっかりと観察する。

役割を担っている。

柴田医師はまた、自己研鑽にも並々ならぬ情熱を注いでいる。たとえば、国際的な骨折治療に関する研究グループ「AO(※3)」に所属。新しい治療方法について海外の医師と積極的に情報共有し、より高度で専門的な外傷治療をめざしている。「AOグループの先生方との意見交換は、大きな刺激になっています。今後も、世界各国の整形外科医と互いに高め合いながら、グローバルスタンダードな治療を、地域の患者さまに提供していきたいと思います」と柴田医師は語る。

(※3)AO(Arbeitsgemeinschaft für Osteosynthesystemen)は、1958年にスイスで創設された骨折治療に関する世界有数の学術的組織。



手外科の領域で 実績を積み重ねる。

馬場記念病院の整形外科のもう一つの特徴は、手外科の指導医が二人いて、専門的な実績を重ねていることである。数多くの手外科の症例から一つ、紹介したい。

**「右手の人差し指と
小指が曲がらない」
という訴え。**

今春、近隣の整形外科クリニックからの紹介で、「右手の人差し指と小指が曲がらない」と訴える70代の女性患者さまが訪れた。屈筋腱（くつきんけん、※4）の断裂だった。

診察した安田匡孝医師（整

形外科部長）は、X線撮影、X線CT撮影、MRI撮影を指示し、症例を確認。人差し指と小指の屈筋腱が断裂しているほか、長年患ってきた関節リウマチによる手の変形が進み、滑膜（かつまく）増殖も激しい状態だった。

関節リウマチは免疫の異常により関節の滑膜に炎症が起こり、関節の中にある滑膜が厚く腫れ、腫れ上がった滑膜はやがて軟骨部分や靱帯（じんたい）を破壊していく病気である。「屈筋腱の断裂の治療の前に、滑膜炎をできる限り切除しなくてはならない。かなり時間がかかるだろう」。安田医師はそんな覚悟をして、手術にのぞんだ。

（※4）屈筋腱とは前腕にある屈筋と指を繋ぐ腱で、指を曲げる働きをする。

**日帰り手術を
可能にする
最新の麻酔術。**

手術当日。手術室には、安田医師と助手の大西勝亮医師（医長）、看護師、そして、麻酔科医が集合した。整形外科では週1回、麻酔の専門的な技術を持つ医師を外部から招いている。今回もその医師に、「超音波ガイド下末梢神経ブロック」を依頼した。これは、痛みに関わる神経に超音波をあてて、神経と神経の周囲組織を描出しながら、神経の周囲に麻酔薬を

注射するもの。従来は全身麻酔が必要だったが、この手法によって部分的な麻酔、そして日帰り手術が可能になった。

**約4時間にわたる、
滑膜炎の治療と
屈筋腱の再建術。**

手術では、助手の大西医師が術野を広げ、安田医師がメスを動かしていく。

まずは、腫れ上がった滑膜の炎症の除去。「とにかく炎症がひどくて、燃え盛っているような状態。それをまずは根気よく取り除いてきれいにしていきま



「手外科は当院の特色の一つ。
指導医2名体制で、幅広く対応しています」と、
安田医師（整形外科部長）。



ある日、行われた手外科の手術の様子。
大西医師が術野を広げ、安田医師が慎重に医療器具を操作していく。



した」と安田医師は振り返る。

約2時間ほどかけて滑膜が丁寧
に除去されると、その奥に屈筋腱の断裂が見えてくる。人差し指の断裂部分については中指の浅指屈筋腱を採取して移行、小指の断裂部分については薬指の浅指屈筋腱を採取して移行し、深指屈筋腱を再建していった。手には、細かい神経や血管が集中しているため、もし神経を傷つけば、痺れや感覚障害がでるリスクも大きい。安田医師は目視で神経や血管の位置を確認しながら、細心の注意を払って医療器具を動か

していった。

約4時間という長丁場となったが、手術は無事に終了した。

手外科で

その名を知られる

馬場記念病院。

馬場記念病院の整形外科では、こうした手外科の症例を数多くこなしている。手の疾患では、腱鞘炎、骨折（遷延治療や偽関節を含む）、靭帯損傷、末梢神経障害（手根管症候群や肘部管症候群など）、良性腫瘍、腱損傷、デュピートラン拘

「患者さまの痛みや苦しみがなくなり、以前の元気を取り戻せるように、いつも最善を尽くしています」(大西医師)。



骨折した患者さまの術後の状態を確認する大西医師。

縮、キーンベック病、変形性関節症、関節リウマチ、感染などに幅広く対応。その高度な専門性は、地域の整形外科クリニックの先生方にも知られていて、多くの紹介をいただいている。逆に、脊椎外科や関節外科、腫瘍外科手術の適応症例がある場合、近隣の関連病院へ速やかに紹介。自院の得意分野を見極め、地域の病院と役割分担すること、地域の患者さまが困る

ことなく、適切な治療を受けられるような体制を整えている。

外来で、

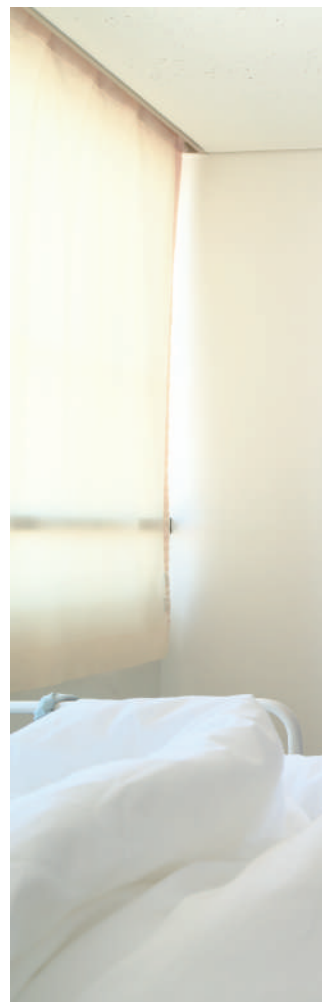
関節リウマチの

治療を継続。

手術後、患者さまは処置のために来院。人差し指と小指はスムーズに曲がる状態になり、右手の腫れもひいて、患者さまは心から安堵しているよ



医局での大西医師。手術の準備など、日々忙しく過ごしている。



うだった。

しかし、患者さまは根本的に関節リウマチを患っている。紹介元のクリニックの同意を得た上で、関節リウマチを専門にする大西医師が外来でフォローしていくことになった。手術前に比べ、滑膜の炎症は10分の1。このまま再燃がないように見守りつつ、薬物療法を検討した。この患者さまはこれまで痛みを軽減するために、ステロイドの薬を服用してきたが、それはあくまでも対症療法で骨や関節の破壊の進行を遅らせることは期待できない。また、ステロイドの薬には副作用の問題もある。「近年は関節リウマチに対する薬物療法は進化しています。そのなかで世界中で広く使用されている関節リウマチの治療薬を選び、少しずつステロイド薬を減らしていく治療計画を立てました」と大西医師。この療法を始めて半年以上、患者さまは手関節の痛みもなく、痺れや違和感、こわばりなども落ち着き、順調に推移しているという。

関節リウマチを専門分野として極めたい。

大西医師は、関節リウマチを専門分野と定め、大阪公立大学のリウマチグループに所属している。現在は、手外科の患者さまで、手のこわばりなどリウマチを疑うケースがあれば、全面的に引き受け、外来で診察している。

大西医師が関節リウマチを専門に選んだのはどうしてだろうか。「一つは、整形外科のなかでも自分の強みとなる専門分野を持ちたかったから。もう一つは、研修中に会った先生が関節リウマチの専門医で、とても尊敬できる方だったので、その先生に憧れてこの道をめざした、というところも大きいですね。今は治療法も進化していますから、手術にも薬物療法にも精通した専門医になりたいと考えています」(大西医師)。

大切にしているのは患者さまとのコミュニケーション。

大西医師は、奈良県立医科大学の出身。大阪市立大学(現大阪公立大学)の医局に入局し、初期臨床研修の後は複数の病院に赴任し、経験を積み重ねてきた。整形外科専門医の資格を



整形外科の手術件数は年間約1,000件。

整形外科では、外傷と手外科を中心に、年間豊富な手術実績を重ねている。

整形外科の主要手術実績(令和5年4月~令和6年3月)

人工骨頭挿入術	146件
骨折観血の手術(肩甲骨・上腕・大腿)	171件
骨折観血の手術(前腕・下腿・手舟状骨)	102件
骨折観血の手術(鎖骨・膝蓋骨・手・足・指他)	41件
腱縫合術	11件

得て、令和5年(2023年)4月に馬場記念病院に入職した。「救急搬送が多く、外傷の治療を経験できる場所で働きたい」と医局に希望を出したところ、当院を薦められました。確かに患者さまが多く、忙しい毎日ですが、先生方、看護師や技師の方などとの関係がとても良好で、ストレスなく勤務させていたでています」とほほえむ。

診療で心がけているのは、コミュニケーション。「関節リウマチの治療薬には、非常に多くの選択肢があつて、それぞれに効果も副作用もあります。どんな薬が患者さまのライフスタイルに合つてい

るのか、また、リズナブルな薬がいいのか、高額な薬がいいのか。患者さまとよく話し合い、患者さまにとって最良の治療法を提案していきます」(大西医師)。

そんな大西医師を、安田医師は頼もしく感じて見守っている。「柴田先生もそうですが、大西先生もとにかく真面目で勉強熱心です。二人とも、患者さまはもちろん、看護師やコメディカルスタッフという関係を築きながら、信頼できる診療を行っていきます。そんな二人の背中を見て、若い医師たちも真摯な診療の姿勢を学んでいるようです」と話す。



カンファレンスでは多職種で意見交換し、退院に向けた道筋を立てる(写真左上)。外来で診察する福田医師(写真右上)。国際学会で発表する柴田医師(写真左中)。病棟で入院患者さまのリハビリテーションを行う斉藤(写真右中)。手術した部位を丁寧に保護する、安田・大西医師(写真下)。

機動力のある整形外科チームを 作り上げてきた。

外傷と手外科を中心に、診療実績を重ねる整形外科。その診療科チーム作り、そして人材育成について見ていきたい。

バランスの取れた 7人の医師構成。

冒頭でも述べた通り、整形外科は、部長、副部长、医長、医員の合計7名体制。ベテランから中堅、若手医師までのバランスのいい医師構成である。そのチーム編成について、安田医師は次のように話す。「七人の侍」という有名な邦画がありますが、7人というのは、本当にバランスがいい。実働部隊として効率よく動ける理想的なチームができ上がっていると思います」。

では、今日のチームは以前からあったのだろうか。「私が当院に赴任したのは10年ほど前ですが、その当時はそれぞれの医師が得意分野を活かして個別に診療するような体制でした。ただ、それでは若い医師を育てる上でも支障があるので、もう少しチームワークを重視したいと考えました。そこで、カレンダーの共有や合同カンファレンスなどの仕組みを少しずつ準備し、その一方で大学医局からも中堅の医師、若手医師とバランスよく配属していただき、今日の形を育ててきました」（安田医師）。現在、医員として勤めて

いるのは千葉紀彦医師、森裕亮医師、井上裕太医師の3人。医師になって3～5年目となる後期臨床研修医として、整形外科の専門医の資格をとるために、臨床経験を重ねている。「当院で働きたいと希望を出してくれる先生も多く、前向きで明るい空気が生まれています」と、安田医師は言う。

手術の前に しっかり準備する 大切さ。

モチベーションの高さを示す特色として、整形外科の早朝



ベテランから若手までチームワークも良好。
7名の整形外科の医師たち。



カンファレンスと勉強会がある。月曜日と金曜日の早朝7時45分からは、手術の前後のカンファレンス。月曜日は予定手術について担当者がプレゼンテーションを行い、金曜日は、1週間の手術症例を報告し合う。こうした早朝カンファレンスの意義について、副部長の福田誠医師に聞いた。

「いい手術は、しっかり準備を行わないとできません。術前カンファレンスでは執刀医が患者さまの症状に合わせた手術方法を検討し、みんなの前で発表し、他の医師が質問したりアドバイスをしています。それによって自信を持つといい手術を行うことができます」といいます。手術の準備から術後の振り返りまで、全員でしっかり意見交換して確認することで、手術のレベルアップに努めています」(福田医師)。

世界の最新医療を常にチェックする。

水曜日と木曜日の早朝8時頃からは、論文の抄読会。水曜日は、担当の医師が興味を持った最新の英語論文をピックアップして紹介。また、学会の予演会や報告会、症例反省会などもこの日に行われる。木曜日

は、手外科に特化した勉強会。手外科の医師必読の情報を掲載した雑誌『Journal of Hand Surgery(アメリカ版)』を読んで討論する。ここには、手外科の手術における最良の選択を扱った最新の論文が掲載されており、世界水準の医療をチェックする機会となっている。

こうした早朝勉強会のほか、学会発表にも積極的に取り組んでいる。「それぞれ診療も多忙なので、あまり無理は言えませんが、医師全員が、年間1回は学会で発表できるようにしたいと考えています」と福田医師は話す。「医師は一生、学び続ける職業です。若い医師たちはこれから違う病院に赴任することになっても、自分で最新の治療を調べて診療していかないといけないと思います。そういう練習の場として、当院が貢献できればいいと思います」(福田医師)。

病診連携に力を注ぎ、地域医療に貢献したい。

最後に、これからの整形外科の運営について、安田医師に話を聞いた。「当院は救急病院ですから、高齢の方の骨折など救

整形外科の朝は早い。
診療前に医局に医師が集まり、
カンファレンスや論文の抄読会などを行い、
常に技量のレベルアップに努めている。



先輩・後輩の垣根を超えて意見交換できる風通しの良さが、
整形外科の強み。

急症例はこれからお断りすることなく、いつでもお受けしていきます。また、高齢の患者さまは認知症や重度内科疾患を併せ持つことも多いため、内科のバックアップも欠かせません。診療科の垣根を超えていつでも協力し合えることが、整形外科の診療の質を高く維持していると思います」。

また、病診連携に力を注いでいくことも、整形外科の大きな方針の一つだという。「当院の周

辺には、新しい整形外科クリニックも増えていて、とても心強く感じています。そうしたクリニックから患者さまを紹介していただいたり、当院で治療を終えた患者さまのフォローをお願いしたり、いい関係を築いていきたいと考えています」と安田医師。社会の高齢化に伴い、整形外科の手術が必要となる患者さまも増えている。そのニーズにしっかり応え、地域医療に貢献していくとしている。

馬場記念病院の整形外科について語る。

高齢化に伴い増える、整形外科疾患。 地域のニーズに、総合力で応えていきたい。

社会医療法人ベガサス／社会福祉法人風の馬 理事長

馬場武彦

**医師にも医局にも
選ばれる病院で
あり続けたい。**

整形外科の7人の医師体制について、馬場はどのように評価しているか。「安田部長以下、非常にチームワークが良く、とてもよくやってくれていると思います。そのベースには、個々に仕事を任せてモチベーションを高めるという安田部長の優れたリーダーシップがあると思います。また、若い先生が当院の働きやすさを評価してくれているのもうれしいですね。早くから医師の働き方改革に取り組み、部署や専門職を超えた風通しのいい環境作りに取り組んできた成果だと受け止めています」と話す。

但し、医師の配属は大学医局の配属によるところが大きい。近年、医師の働き方は多様化したが、一般的なキャリアアップとしては、医学部を卒業し、医師免許を取得後、2年間の初期臨床研修を受ける。その後、大学医局に籍を置き、後期臨床研修の3年間、大病院やさまざまな関連病院で研修を受け、専門医をめざしていく。一方、大学医局は地域医療の安定化を念頭に置いて、大学附属病院や学外の関連病院などに医局員を派遣していく。「私たち病院は大学医局と協力して、地域医療の安定化を維持するとともに、若い医師がよい環境で育つように支えていく役割があります。その役割をしっかりと果たせるように、医師を育てる実践

教育の場として役立っていききたいと考えています」（馬場）。

前述のように、整形外科では

医師を育てるための学びの機会を数多く用意している。「当院では整形外科に限らず、学会や



セミナーへの参加や論文発表を積極的に奨励し、その費用の一部を援助しています。これからもそうしたバックアップに力を注ぐとともに、働きやすい環境作りを図り、人材教育に努めていきたいと思います」と馬場は話す。

**地域のなかで役割を
果たし、患者さまを
支え続けていく。**

では、今後の整形外科のあり方について、どのように構想しているだろうか。「全国に共通して言えることですが、この地域でも高齢化が進み、整形外科に対する社会ニーズも年々高まってきました。高齢になると筋力が衰え、骨が脆くなり、骨折し

やすくなります。また、外傷をはじめとした手外科疾患も増えていきます。そうした患者さまのニーズに、救急も含めて24時間365日応えることは、当院の大きな使命です。地域の病院や診療所の先生方と役割分担・連携をしながら、これからも当院だからできることに取り組みんでいきたいと考えています」と馬場は話す。

高齢者の場合、ケガや疾患を機に、運動機能や筋肉量が衰え、要介護の状態や寝たきりになつてしまうリスクも高い。とくに高齢者の骨折は、健康寿命を左右する重要な問題になっている。「当院では（以前と同じような歩行能力を取り戻す）ことを目標に掲げ、看護師や理学療法士、作業療法士など多職種によるサポートに全力投球しています。さらに退院後、在宅療養まで切れ目なく医療や介護を提供できるのも、私たちペガサスの強みだと考えています。高齢になつても、ケガや疾患を経験しても、長く元気に暮らせる地域を作る。その大きな目標を掲げて、これからもペガサスグループの総合力を結集していきたいと思います」。馬場は強い決意を込めて、そのように語った。



地域医療を支える診療所。 皆さまを最適な医療へと繋ぐ。

ベガサスは、地域の診療所と連携を図っています。

診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。

丁寧な診察による適切な診断・治療を行うとともに、

専門的な検査・治療が必要と判断した際には、患者さまに病院を紹介して下さるなど、

皆さまにとっては一番身近な存在であり、

「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理して下さいます。

第二特集では、こうした診療所をご紹介します。※診療所はアイウエオ順で掲載

**笑顔と優しさをモットーに、地域の患者さまの
「自分らしく生きる」を支える。**

診療所

**ご家族を支えることが、
患者さまを
支えることに繋がる。**

**ご自宅に帰られた後も患者さまを
支えたいという思いを胸に。**

令和3年5月に開業した、こ
さか在宅クリニック。院長の小
坂錦司医師は、もともと消化
器外科医としてがんの手術を
数多く手がけていた。しかし、
当法人のベガサスリハビリテー

ション病院で勤務するなかで在
宅医療へ興味を持ったという。

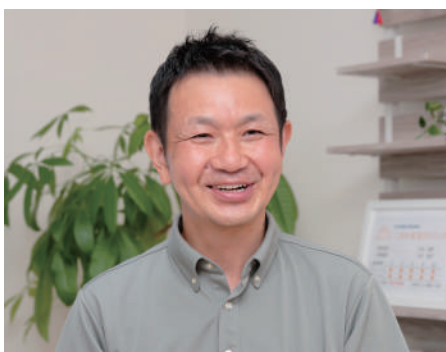
「多くの患者さまがご自宅に
帰りたいという願いを持っている
ことに改めて気づき、在宅医療

への転身を決意しました。当時
は急性期の治療を終えた患者

さまの自宅復帰を支えていま
したが、患者さまがご自宅に帰

られた後も支えることがあるの
ではと考えたのです」。

同院は在宅療養支援診療
所として在宅の患者さまを診



者さまは約100名。がんを中
心に脳卒中や認知症、整形疾
患、呼吸器疾患など症状はさ
まざまである。患者さまやご家
族に寄り添いながら、看取りも
行っている。

**患者さまやご家族のお困りごと
一緒に考えてみる。**

在宅医療では、患者さま本人
だけでなく、ご家族を支えるこ
とも重要である。「患者さまの
不安を和らげるために、同じ目
線に立つことを大切にし、優し
くゆつくりと説明することを心
がけています。ご家族とのコミュ
ニケーションも大事ですね。長
い間患者さまの側にいらつしや
つて不安になることも多いと思
いますので、困っていることがあ
れば積極的に声をかけ、解決策を

一緒に考えることが使命だと
考えています」と院長はほほえ
む。特にがんの末期の患者さま
のご家族から、食事の悩みを聞
くことはよくあるという。「ご
家族には食べられないのは自分
のせいかなと悩まれる方も多い
です。その場合は、食べられない
のは病気の症状であることを
説明して、頑張っているご家族の
不安を取り除いてあげるのも
私たちの役割だと思っています」。

また、最近では人生会議（アド
バンスケアプランニング）に注目
しているという。厚生労働省が
進めている取り組みで、人生の
最終段階に、自分がどのような
医療やケアを望むかを、前もつ
て考え、信頼する人たちと繰
り返し話し合いを行う。「元氣
なときに話し合いをするのは難

しいかもしれませんが、患者さまの希望を予め知っておくことが、患者さまだけではなくご家族のためにもなると思いますので、もう少し広がってほしいですね」。

最後に、今後の目標は何だろうか。

「現状のペースを維持しながら診療を続けていきたいと思えます。患者さまやご家族がご自宅で自分らしく暮らせるように支えることで、皆さまの笑顔が少しでも増えるとうれしいで

すね」と、院長は優しい口調で締めくくった。



こさか在宅クリニック

院長：小坂 錦司

所在地：大阪府和泉市青葉台2-16-7

TEL：0725-56-2220 URL：<https://kosaka-home-clinic.com/>

診療科目：内科・在宅診療 ※完全予約制

訪問診療を広げて、 患者さまの地域での穏やかな暮らしを支える。

診療所

患者さまが通えなくなったとしてもご自宅でも診られるクリニックをめざして。

在宅医療のニーズに応えるために、
消化器外科医から在宅医へ。

堺市北区長曽根町にある「だんホームクリニック」は、今年で開業8年目を迎える。院長である段俊行医師は、兵庫医科大学を卒業後、勤務医として長年市中病院で研鑽を積

み、30代後半で在宅医療の世界に足を踏み入れた。もともとは胃がんや大腸がんなどを診る消化器外科医であった段医師。どういふきっかけで在宅医療に興味を持ったのか。「外科医として勤務していた頃、がんの終末期の方が退院後にご自宅でのように療養しているのか興味を持ちました。その後、在宅医療へのお誘いがあり、これから在宅医療のニーズがさらに高まることも考えて、在宅医療専門

の医療機関で在宅医療に関わるようになりました」。

在宅医療では外科の知識に加えて、内科などの幅広い医療知識が必要になる。そのギャップはなかったのだろうか。「たとえば糖尿病の患者さまについてを慢性的に長い経過を診ていくということは経験がなかったので、最初は戸惑いました。それから本当に手探りというか、そのときに一緒に働いていた先生にいろいろと教わりながら一から勉強しなおしました」と振り返る。

多職種連携を強化し、地域で暮らす患者さまに寄り添う。

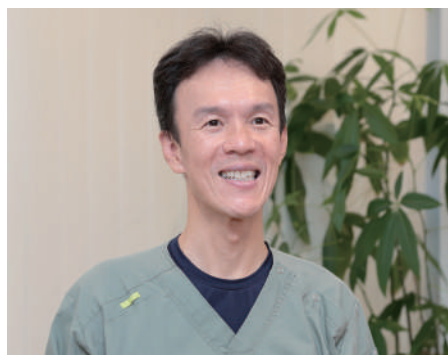
同院は、在宅療養支援診療所として訪問診療を中心に、外来での内科診療も行っている。70代以上の高齢の患者さまだけでなく、40〜60代のがんの末期の患者さまへの訪問診療も多い。「患者さまが求められるもの、にどれだけ応えられるかがすごく大事だと思います。100歳近い患者さまもいらつしゃいますので、病気を治すだけでなく、住み慣れた地域で穏やかに生活を続けるために何が必要なのか、そこに私たちはどう携わるべきかを常に心がけていますね」。

そのためにも、段院長は多職種との連携を深め、患者さまの

全体的なケアの向上をめざしている。

最後に、今後の目標を聞く。

「堺で訪問診療と言えば、だんホームクリニックの名前が挙がってくるようなクリニックにしていきたいと当院スタッフともよく話をしています。しかし、訪問診療を知らない方もまだまだたくさんいらつしゃいます。たとえば堺の北区は団地が多く、エレベーターがないから通院できないという方もいらつしゃるので、そういう方たちにご自宅でも治療や療養ができることを知ってほしいですね。病院や老人ホームと同様に、ご自宅でも最期まで療養することができ、ます。ご自身で最期のときをどこで過ごしていくかを選択できるように支援していきたいと考えています」。



つばさ 69
2024年秋号
令和6年9月発行第19巻第2号
(通巻69号)

地域医療を考えるベガス情報誌

発行人 馬場武彦
編集長 平岩敏志
編集 ベガス広報委員会
発行 HIPコーポレーション
社会医療法人ベガス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558 <https://www.pegasus.or.jp/>



医療法人向翔会 だんホームクリニック

院長：段 俊行

所在地：大阪府堺市北区長曽根町1207-7

TEL：072-246-6611

URL：<http://www.dan-hc.jp/index.php>

診療科目：内科・訪問診療 ※外来は完全予約制

地域には多くの医療機関があり、
いずれもが診療技術の向上に全力を注いでいます。
換言すると、医療機関として、
一人ひとりの医師をいかに育てるかということです。
専門領域でのスキルアップを後押しすることはもちろん、
働き方や生活の質を支えるための環境整備が、
医療機関の責務です。
こうした観点は、各分野の専門職に対しても変わりはありません。

良い医師を育てる。
良い専門職を育てる。
その実践は、自院のためだけではなく、
地域医療全体の質的向上に繋がります。
複数の医療機関が、診療技術を競い合いながらも、
認め合い、補完し合い、そして、調和し、
超高齢社会に必要とされる医療を、過不足なく提供する——。
地域医療に責任を持つものとして、
常に追いついていかなくてはならない根幹と考えます。

社会医療法人ペガサス／社会福祉法人風の馬 理事長 馬場武彦